ベートーヴェンとモーツァルト

近ごろは学問の裾野が広がってきたので，学会での研究発表を聞いていると，自分の専門でないことになると，解りにくいことが少なくありません．はなはだしい場合には，その研究が何を目的としてなされ，またどのような方法で結論に導かれているのかさえ理解ができないことがあります．

これはもちろん筆者の勉強不足によるもので，その点は大いに反省すべきです．しかしながら演者の方々にも，せっかくの機会ですから，十分準備して良い発表をして少しでも多くの研究者に解らせるように工夫をしていただきたいものと思います．

話は変りますがベートーヴェンとモーツァルトは，ほとんど同じ時期にオーストリアのウィーンを舞台に活躍した大作曲家です．この2人は全然違った作風です．Ludwig van Beethoven (1770—1827) は，ドイツのロマン派音楽を創始した人で，確かにベートーヴェンの第九交響楽「合唱」などを聴いていると，魂の底を揺すぶられるような強烈な印象を受けます．学会の研究発表会の時にも，彼のように眉間に縦じわを寄せ，高く高く深く深く考えて一語一語おろそかにせず，腹わたからしぼり出したような声で深淵な学理を説く方もいます．

その一方，Wolfgang Amadeus Mozart (1756—1791) のほうは，わずか35歳の生涯の間に626曲の作品を残したが，彼は「おいしいお酒を飲んだ時，あるいはご馳走を前にした時，私の心の中には楽しい気持ちがいっぱいになって，そして協奏曲やメヌエットが浮かんでくる．それをそのまま五線紙に書いただけである」と言っています．実際，モーツァルトの手書きの楽譜はどこにも直した跡がなくて，苦心をした様子が残っておりません．

学会発表を聞いているとモーツァルト式の人もいて，昨日思いついたことを話したくて話したくて仕方がなく，終始ニコニコいかにも嬉しそうに，手振りまで入れて話をする人がいます．本当は苦心惨憺の結果に産み出された結果でも，このような研究発表は聞いていて楽しく，つり込まれてしまいますが，さてと後で振り返ってみると，あまりの話術に引き込まれていて，肝心の所は漠然として悔しい思いをすることも少なくありません．

このように，学問をするときベートーヴェン型とモーツァルト型とがあると思いますが，少なくとも学会で発表したり学術論文を書いたりする時には，表現法にも工夫をして，周到な準備をしておくべきだと思います．ORは特に実務家や研究者など各方面の人が会員ですから，その発表の方法には周到な工夫をする必要があります．

アメリカの大学ではケーススタディを中心として，平素から討論に重点を入れており，また論文などについても，教授が何度もていねいに手を入れて見てくれて，難解な表現は徹底的に直してくれるということです．大学院学生の学位論文等や学部学生の卒業論文等は，東大在職中相当手を入れたことがありますが，しかしそれでも不十分であったように思われて，いま取り返しのつかない反省をしているところです．

私の考えたPDPCなども多段式決定問題の表現の方法であると受け取ってもらえるとありがたいと思います．

(近藤次郎)

—— ○ —— ○ —— ○ —— ○ ——

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．